小矢部市埋蔵文化財調査報告書第20冊

富山県小矢部市

# 桜町遺跡

―個人住宅の建築に伴う中出地区の調査―

1987

小矢部市教育委員会

## 例　　言

1．本書は富山県小矢部市教育委員会が1986（昭和61）年度に国庫補助事業として実施した、小矢部市桜町所在の桜町遺跡（中出地区）の調査の概要を報告するものである。

2．調査は小矢部市教育委員会主事高木場万里、同嘱託林浩明が担当した。

3．本書の作成は小矢部市教育委員会関係者の協力を得て、高木場が担当した。

4．調査の実施については、土地所有者をはじめ地元の方々の協力を得た。厚くお礼申し上げる。

5．出土遺物は小矢部市教育委員会が一括して保管している。

## 目　　次


Ⅰ　遺跡の位置と調査の経緯 …… 2

1．遺跡の位置 …… 2

2．調査の経緯 …… 3

Ⅱ　遺構と遺物 …… 4

1．層位 …… 4

2．遺構 …… 5

3．遺物 …… 8

Ⅲ　まとめにかえて …… 18


### 図　版


図版１　遺構全景

ＳＤ－１

図版２　ＳＤ－２・３

ＳＤ－３

図版３　調査終了後

縄文土器出土状況

図版４　縄文土器出土状況

縄文土器出土状況

図版５　縄文土器出土状況


### 表


表１ …… 16

表２ …… 16


### 挿　図


第１図　周辺の遺跡 …… 2

第２図　層位 …… 4

第３図　ＳＤ－３断面 …… 5

第４図　遺構 …… 7

第５図　ＳＤ－２出土遺物 …… 9

第６図　ＳＤ－３出土遺物 …… 9

第７図　Ｐ－13・Ｐ－19出土遺物 …… 10

第８図　弥生土器・土師器 …… 12

第９図　土師器 …… 13

第10図　須恵器 …… 15

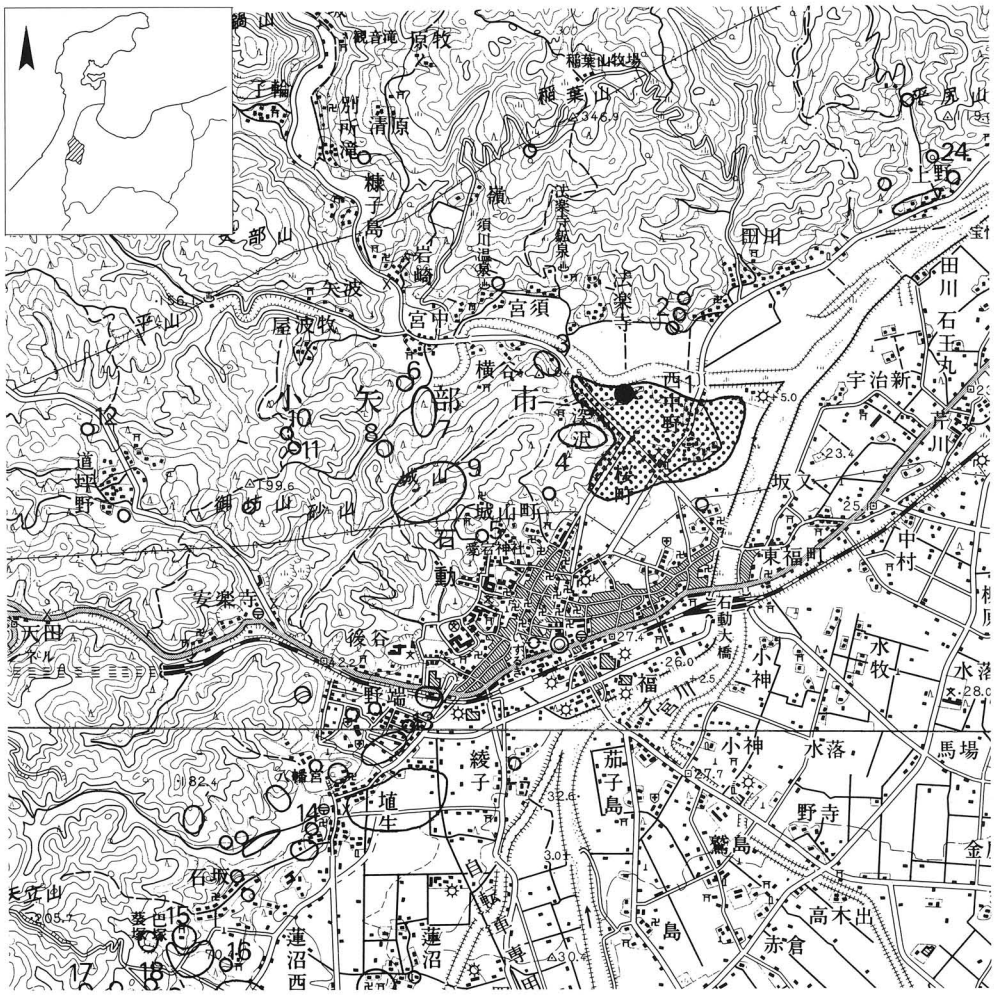
第11図　土錘 …… 16

第12図　石錘 …… 17

# Ⅰ　遺跡の位置と調査の経緯

## 1．遺跡の位置（第１図）

小矢部市は富山県の西端に位置し、面積約134㎢、人口約37,000人、南北および西の三方を丘陵に囲まれ、東には散居村として知られる砺波平野が展開する。市域は西に大きく湾曲しながら北流する小矢部川によって東西に二分される。この小矢部川左岸から丘陵地にかけての一帯は、県下でも有数の遺跡密集地帯を形成している。1979年度から実施され




1．桜町遺跡　　2．田川三角山横穴群　　3．桜町横穴群　　4．天狗山古墳群　　6．宮中遺跡
7．屋波牧遺跡　　8．屋波牧南遺跡

第１図　周辺の遺跡（●調査位置）

た分布調査では163ヶ所の遺跡が確認されている。

桜町遺跡は市街地の北方約１㎞、桜町・西中野地内に所在する。北を子撫川、東を小矢部川によって限られた低位段丘上に立地し、面積約618,000㎡、縄文時代から近世に至るまでの長期にわたって営まれた遺跡である。周辺には、子撫川対岸の田川三角山横穴群（２）、背後の丘陵に桜町横穴群（３）、天狗山古墳群（４）、子撫川上流に縄文時代前期の宮中遺跡（６）、同じく中・後期の屋波牧遺跡（７）、屋波牧南遺跡（８）等の遺跡が知られている。また、当遺跡は1980年度から国道８号小矢部バイパス建設に伴う発掘調査をはじめ、主要地方道小矢部伏木港線の新設・改良に伴う調査など大小の発掘調査が行われ、多数の遺構・遺物が確認されている。

## 2．調査の経緯

1985年秋、付近で発掘調査をしていた調査員が遺跡中央部北端において地魂祭が行われていることを発見し、住宅が建築されることを知った。関係者との協議の上、翌年試掘調査を実施した結果、弥生時代後期から、平安時代までの遺構・遺物が存在する上層と、縄文時代中期の遺物が存在する下層が確認され、国庫補助を得て発掘調査を行うことになった。調査に際しては、上層については敷地全体を対象とし、下層については建物の建つ部分のみを対象とし、庭となる部分については調査の対象からはずすことになった。

調査区遠景

調　査　前

# II 遺構と遺物

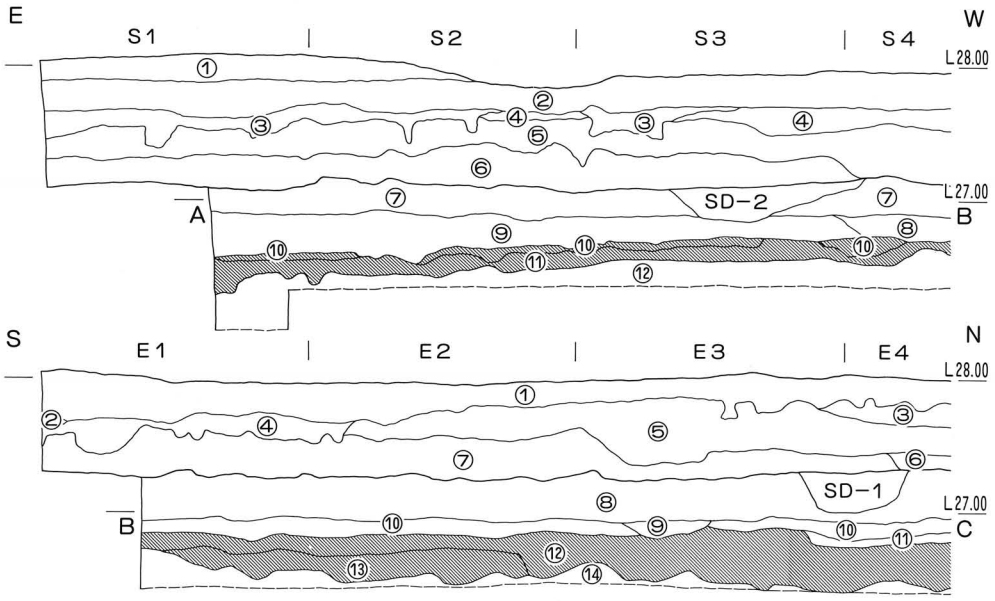
## 1. 層　位（第２図）

桜町遺跡では、毎年継続して実施される国道８号小矢部バイパス建設に伴う調査や、遺跡内各所で実施される調査に対応するため、遺跡全体を覆う南北をＸ軸、東西をＹ軸として、20ｍを１ポイントとする座標によってその位置を表わしている。本調査区は、遺跡中央部北端にあり、Ｘ57～58、Ｙ88～88.6の範囲内に位置する。しかし、調査を行うにあたって便宜上調査区南辺をＳライン、東辺をＥラインとして、南東角を基点に２ｍごとに区切り、遺物の取り上げおよびセクション実測の基準とした。

標準的な層位は、表土、Ⅰ黒褐色土、Ⅱ黒灰色土、Ⅲ黄灰色土、Ⅳ明黄褐色砂あるいは淡黒褐色砂質土、Ⅴ淡茶褐色土（やや砂質）、Ⅵ緑灰色砂である。

遺構は黄灰色土上面で溝・ピットなどを検出した。

遺物は表土以下黄灰色土に達するまでの各層から出土しているが、特に黒褐色土からの出土が著しい。また調査区南辺に広がる黄褐色砂、褐色砂礫、褐色砂（あらい）からも多




Ｓ１～Ｓ４の層位
①あげ土　②表土　③茶褐色土　④褐色砂礫　⑤黒褐色土　⑥黒灰色土　⑦黄灰色土　⑧暗灰色粘質土　⑨明黄褐色砂　⑩淡茶褐色土（やや砂質）　⑪黒灰色粘質土　⑫緑灰色砂

Ｅ１～Ｅ４の層位
①表土　②黄褐色砂　③灰褐色土　④褐色砂（あらい）　⑤黒褐色土　⑥灰黄色土　⑦黒灰色土　⑧黄灰色土　⑨淡黄褐色砂　⑩淡黒褐色砂質土　⑪暗褐色砂　⑫淡茶褐色土（やや砂質）　⑬淡黄褐色砂質土　⑭緑灰色砂

第２図　層　　位

数の遺物が出土しているが、細かく砕かれており、近年の攪乱を受けた可能性が考えられる。以上の層位から出土した遺物は、弥生時代後期から平安時代までのものがそのほとんどを占める。

現地表下約1.1～1.3ｍに堆積する淡茶褐色土（やや砂質）からは、縄文時代中期の遺物が多量に出土した。この層は、調査区北西では30～50cmの厚さで堆積するが、南東ではしだいに薄くなり､かわって黒灰色粘質土あるいは淡黄褐色砂質土がみられ、多少その量は減るが遺物の出土もみられる。なお、今回の調査では、縄文時代中期に属する遺構は検出できなかった。

**2．遺構**（第４図）

検出された遺構には、溝およびピット群があげられる。前に述べたように、遺構は黄灰色土上面で検出できる。

**溝**

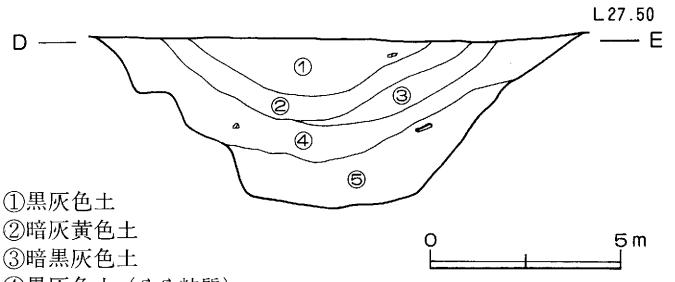
溝にはＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＤ－３がある。

**ＳＤ－１**　調査区南西を北西－南東方向に走行する。幅約30～45cm、深さ約11～18cmをはかり、断面はＵ字形をなす。途中Ｐ－５・Ｐ－33によって切られている。また、南東端も水道管によって切られているが、さらに調査区外へ延びる。埋土は黒灰色土である。特に分層はできない。少量の遺物が出土している。

**ＳＤ－２**　調査区南東を南西－北東方向に走行する。幅約60～70cm、深さ約30cmをはかる。断面はゆるやかに広がるＶ字形をなし、底面はほぼ平坦である。途中水道管によって切られるが、北東端ではその幅をやや広げ、ＳＤ－３に続く。埋土は上下２層に分けられるが、ともに暗灰褐色土で、上層に比べて下層には砂の混入が多い。遺物は古墳時代前期と思われる土器（第５図１・２）が溝中央部および南西端でそれぞれまとまって出土した。

**ＳＤ－３**（第３図）

調査区中央を北西－南東方向に走行する。幅約130～150cm、深さ約50～60cmをはかる。断面は大




第３図　ＳＤ－３断面

きく広がったＶ字形をなし、底面は丸みをおびる。ところによっては、側面が階段状をなす。埋土は黒灰色土、暗灰黄色土、暗黒灰色土、黒灰色土(やや粘質)、黒色粘質土の5層に分けられ、暗灰黄色土、暗黒灰色土以外の各層から遺物が出土している。特に溝南東半からの出土が多く、弥生時代後期から古墳時代前期に相当するものである（第6図)。この溝は、途中Ｐ－32・Ｐ－12が重複し、南東端ではＳＤ－２と合流する。

ＳＤ－１

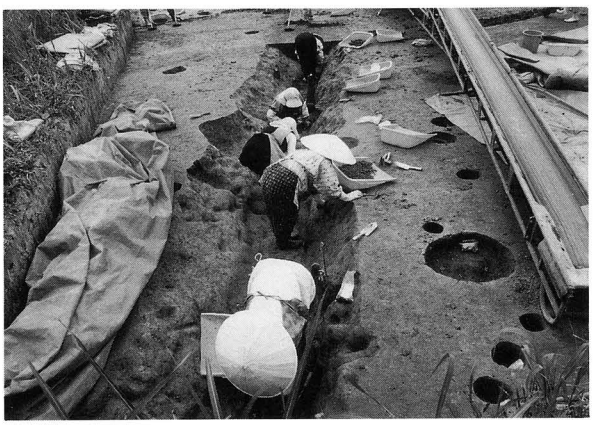
ＳＤ－２とＳＤ－３の新旧関係については、平面プランでは明確な切り合いはつかめなかった。しかし、合流地点の断面の観察により、その構築された時期はＳＤ－３がＳＤ－２に先行するものと考えられる。

ＳＤ－２

ピット群

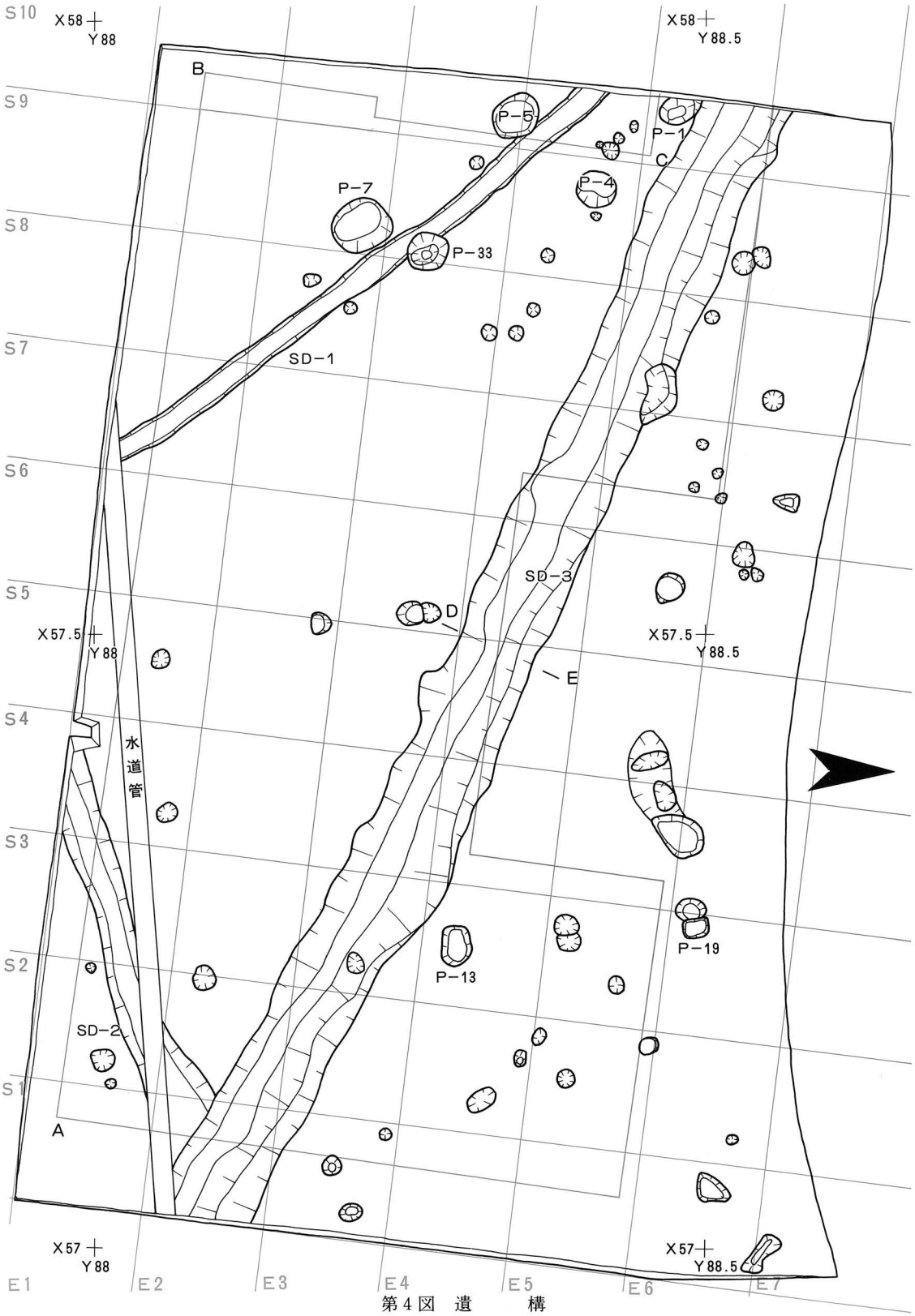
検出したピットは比較的大きなものだけで44ヶを数える。用途の不明なものがほとんどである。

**Ｐ－１・Ｐ－４・Ｐ－５・Ｐ－33**　配列に疑問は残るが、柱穴ではないかと思われる。径約60～70cm、深さ約40cmをはかり、円形をなす。Ｐ－33以外は全て小片ではあるが遺物の出土がみられる。



ＳＤ－３

**Ｐ－７**　長径約90cm、短径約80cm、深さ約40cmをはかり、円形をなす。検出したピット群の中では


S10
S9
S8
S7
S6
S5
S4
S3
S2
S1
E1
E2
E3
E4
E5
E6
E7
X58
Y88
X58
Y88.5
X57.5
Y88
X57.5
Y88.5
X57
Y88
X57
Y88.5
A
B
C
D
E
P-5
P-1
P-4
P-7
P-33
SD-1
SD-3
SD-2
水道管
P-13
P-19

第4図　遺　　構

最大のものである。土師器の細片が１片出土している。

Ｐ－13　長径約60cm、短径約40cm、深さ約40cmをはかり、楕円形をなす。古墳時代前期の土師器が２個出土している（第７図16・17）。

Ｐ－19　長径約40cm、短径約30cm、深さ約23cmをはかり、隅丸方形をなす。第７図18・19にあげた須恵器の坏が２個体出土している。

### 3．遺物

出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・近世陶磁器・石器・土錘などがある。

**ＳＤ－２出土土器**（第５図）

１．口径16.4cm。口縁帯に凹線文をもつ有段口縁の甕。胴部外面に荒いハケ調整、内面にヘラ削を行う。２．口径16.2cm。口縁が弓なりに外反する甕。胴部内面にハケ調整を行う。

**ＳＤ－３出土土器**（第６図）

３．口径13.9cm。口縁帯に凹線文をもつ有段口縁の甕。４．底径16.7cm。外面にヘラ磨を行い、３ヶの円孔をもつ。５．底径15cm。外面に丹彩を施す。６．口径13.9cm。有段口縁の甕。磨滅が激しく明確ではないが、口縁帯に凹線文をもつ可能性がある。７．口径19cm。有段口縁の甕。８．底径13.5cmの器台。外面はヘラ磨、内面はハケ調整を行う。外面に丹彩を施す。９・10．口径15.4cm、13.9cmをはかる壺。内外面にヘラ磨を行う。11．口径18.8cm。有段口縁の甕。内面頸部以下ヘラ削を行う。12．口径17.4cm。鈍い有段口縁の壺。頸部内面にハケ調整を行う。13．口径12.1cm。外反する口縁の端部が直立する小型鉢。胴部外面にハケ調整を行う。14．口径27.5cm。鈍い有段口縁の壺。15．口径17cm。くの字状口縁の甕。胴部外面にハケ調整を行う。

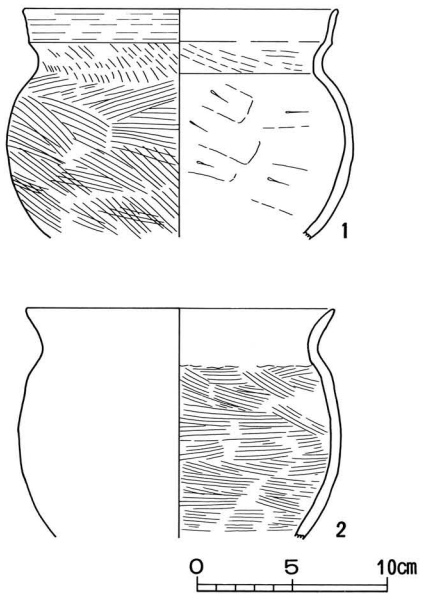
**Ｐ－13・Ｐ－19出土土器**（第７図）

16・17．口径15.4cm、13cmをはかる。外反する口縁の端部がわずかに直立する。18．口径10.9cm、器高4.1cm。19とともに低い高台を有する。

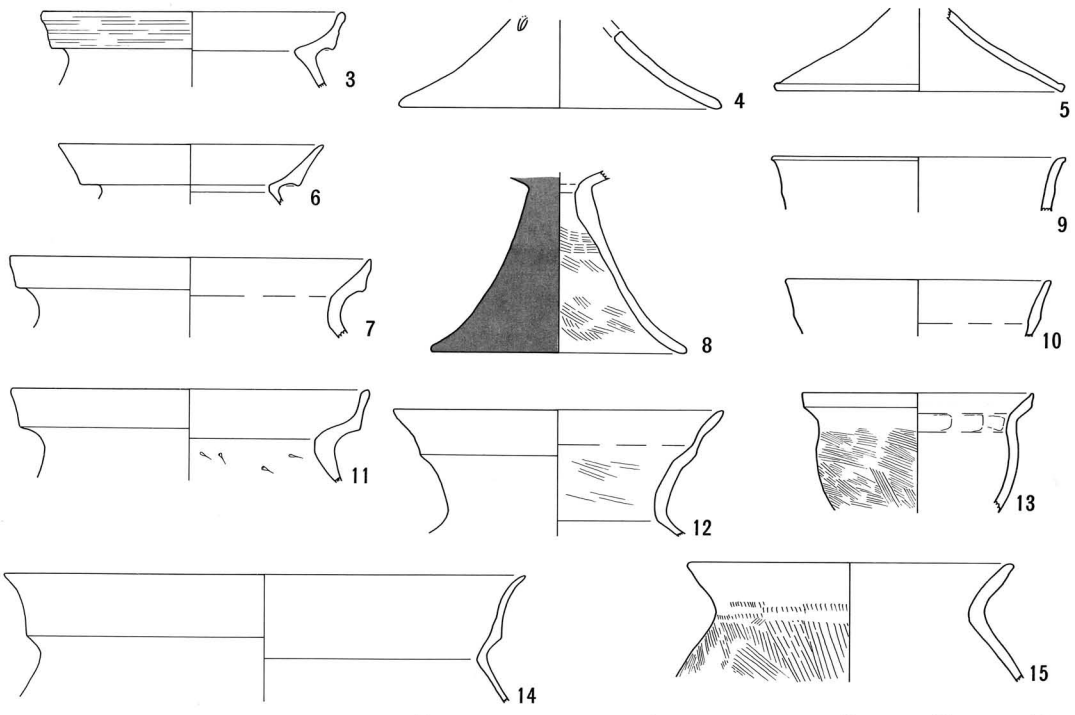
**弥生土器・土師器**（第８・９図）

20．蓋形土器、つまみ径4.8cm。内外面に細かいヘラ磨を行う。21．口径19.6cm。脚部に段をもつ器台。外面および坏部内面にヘラ磨を行う。坏部内面に丹彩を施す。22．口径８cm、器高13.2cm、底径8.5cm。口縁がやや内傾し、体部に沈線をめぐらす。磨滅しているがヘラ磨を行うと思われる。23．底径17.8cm。外面にヘラ磨、内面にハケ調整を行う。４ヶ

の円孔をもち、外面に丹彩を施す。24．口径18.4cm。有段口縁の甕。口縁段部に刻目を施す。25．口径6.9cm、器高７cm、底径9.1cmの小型器台。外面にヘラ磨、脚部内面にハケ調整を行う。26．27．口径15.9cm、19.2cmをはかる有段口縁の甕。口縁帯に凹線文を有す。27は胴部外面にハケ調整、内面にヘラ削を行う。28．口径10cm。受部に鈍い稜をもつ器台形土器としたが、脚部の可能性もある。内外面にヘラ磨を行う。29．口径13.4cm。大きくひらく口縁の端部が直立する壺。口縁外面にヘラ磨き、内面および頸部外面にハケ調整を行う。口縁外面上部に丹彩痕がみられる。30．口径13cm。椀形の坏部をもつ高坏。内外面ともヘラ磨を行い、丹彩される。31・32．口径16.4cm、18cmをはかる有段口縁の甕。31は胴部内面にヘラ削を行う。33・34．

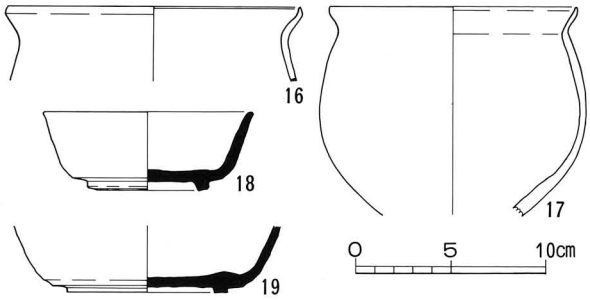



第５図　ＳＤ－２出土遺物

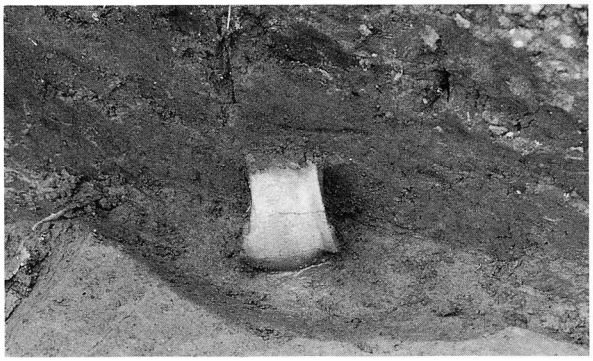



第６図　ＳＤ－３出土遺物

脚部に円孔を有す器台・高坏。外面にヘラ磨を行う。35．口径3.8cm、器高3.3cm。手づくね土器。36．口径12.3cm。有段口縁の端部が短く、直立する壺。胴部内面に指頭痕がみられ、ヘラ削を行う。37．口径12cm。口縁は内湾して立ち上がる。38．口径15.9cm。くの字状口縁の端部が大きく外反する。胴部外面にハケ調整を行う。39．やや中膨みの脚部が裾で強く屈折する高坏。40．口径16cm、くの字状口縁を有し、胴部外面にハケ調整。内面にヘラ削を行う。41・42．短い脚部が裾で外反する高坏である。43．基部から広がった脚部が裾で外反する高坏である。44．口径10.5cm、器高3.4cm。45．口径14cm、器高5.1cm、44とともに半球形に近い形をもつ椀である。46．口径13.5cm、器高５cm。外反する口縁をもつ椀。外面はヘラ削のあと荒いヘラ磨を行う。47～55は内面黒色土器である。47．口径13.6cm、器高5.3cm。半球に近い形をなし、口縁部外面および内面にヘラ磨きを行う。48．口径17.5cm、器高5.3cm。口縁端部は外反し、内面に細かいヘラ磨を行う。49．口径17cm、器高5.4cm、口縁部は




第７図　Ｐ－13・Ｐ－19出土遺物

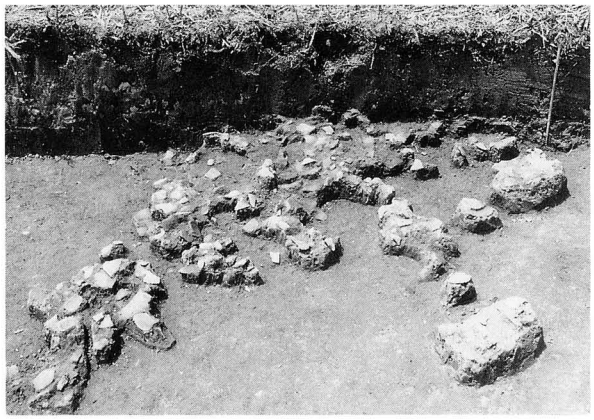


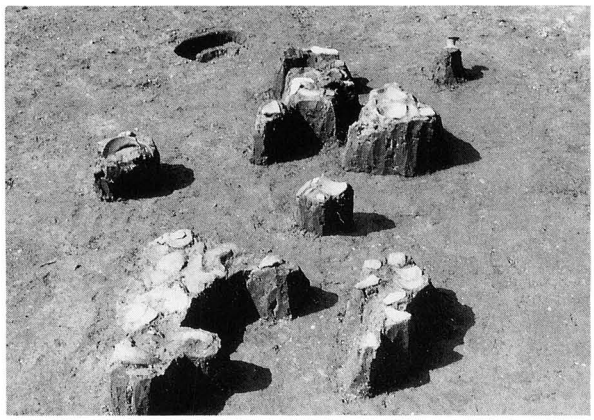
ＳＤ－２

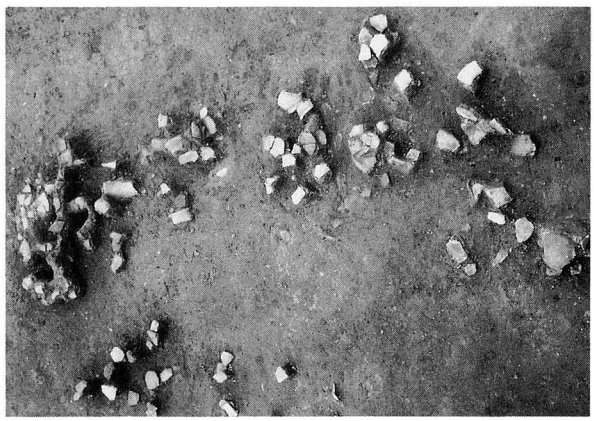
ＳＤ－３

ＳＤ－３

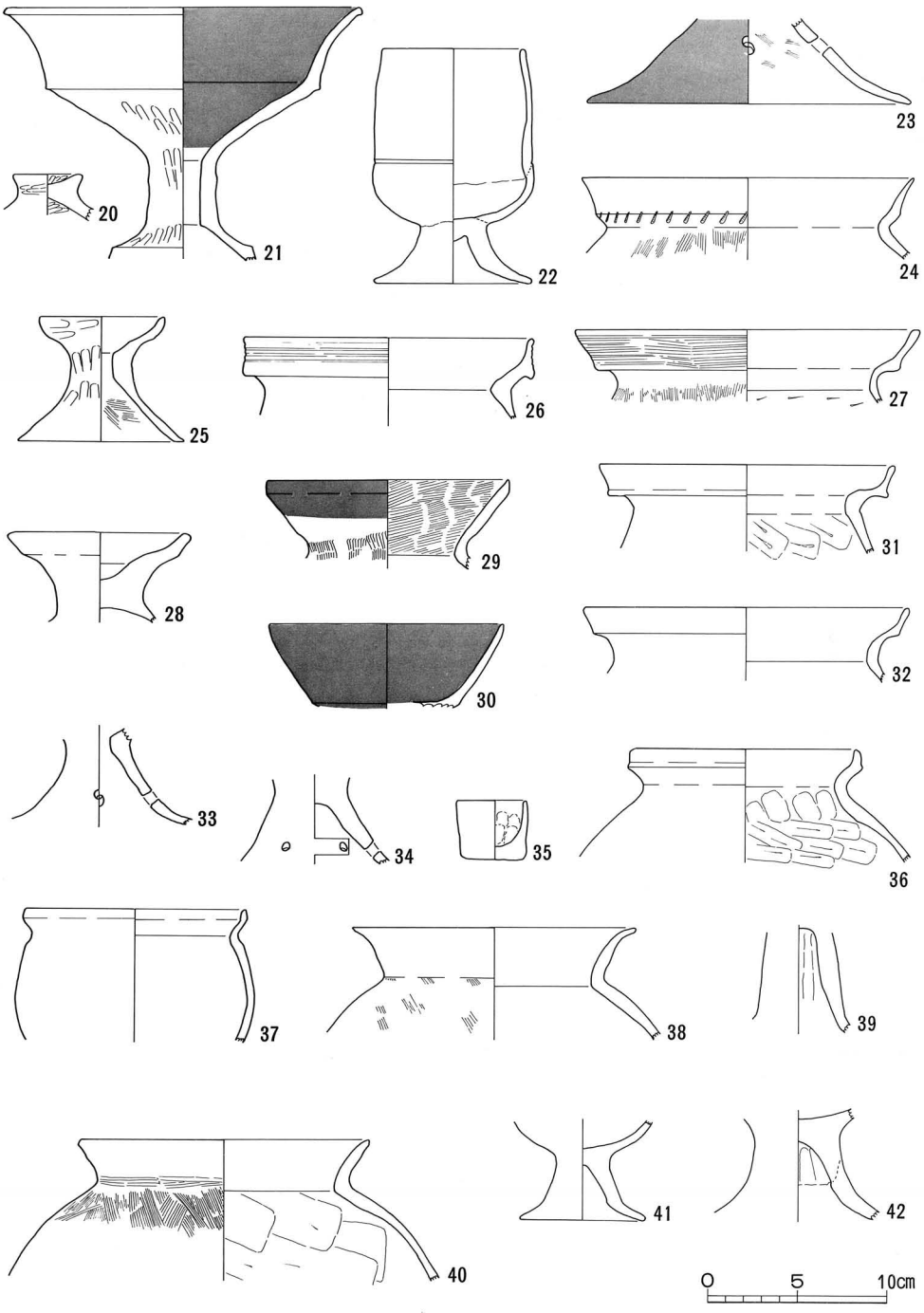
外反し、内面にヘラ磨きを施すと思われる。50．口径19cm。浅い椀形の坏部をもつ高坏で、内外面ともにヘラ磨きを行う。51．口径17.2cm。口縁端部がわずかに外反し、口縁部と体部の境にわずかに稜をもつ、口縁外面にヨコナデ調整、内面はヘラ磨を行う。52．口径15.5cm、口縁部は大きく外反する。口縁外面ヨコナデ調整、内面にヘラ磨きを行う。53．口径17.2cm、口縁部は外反し、内面に稜をもつ、口縁外面ヨコナデ、内面ヘラ磨を行う。54．口径16cm、口縁部は大きく外反し、底部は平底状をなすと思われる。口縁外面ヨコナデ、内面にヘラ磨を行う。55．口径13.3cm。器高5.1cm、半球形に近い形をなし、口縁端部を丸くおさめる。器壁は厚い。56．口径22、外反した口縁の端部に面をもつ長胴甕。胴部外面上半はタテ方向のハケ調整のあとカキメを施し、下半にはヘラ削がみられる。内面はタテ方向のハケ調整がみられる。57．口径19.5cm、外反する口縁端部が先細りとなる。外面にハケ調整を行う。58．口径20.1cm、口縁端部をまるくおさめ、胴部内外面ともにタテ方向のハケ調整を行う。65．口径20.8cm。口縁端部がわずかに屈曲して終わるもの。胴部外面にはタテ方向のハケ調整を行うが、



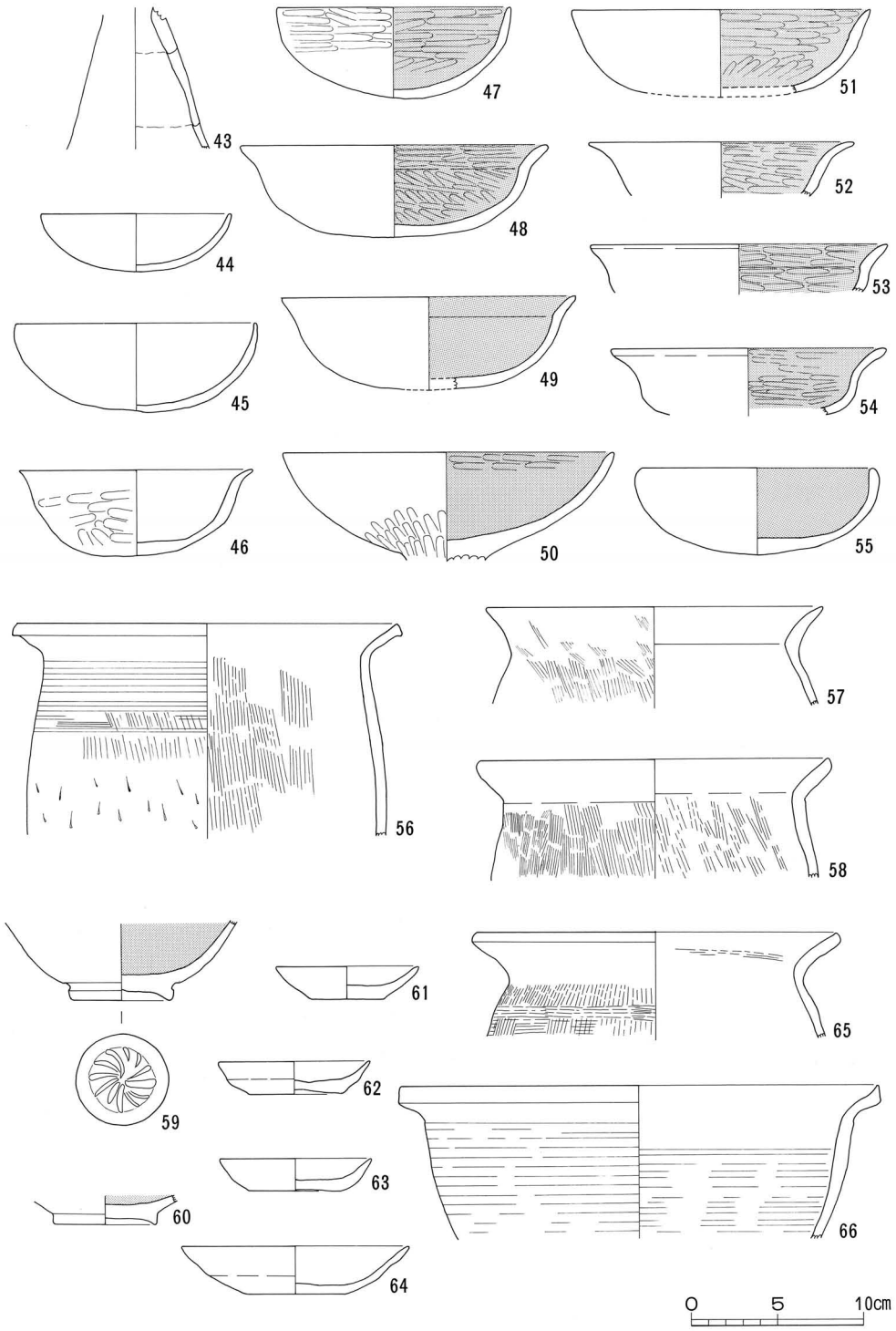




遺物出土状況


20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
5
10cm

第８図　弥生土器・土師器

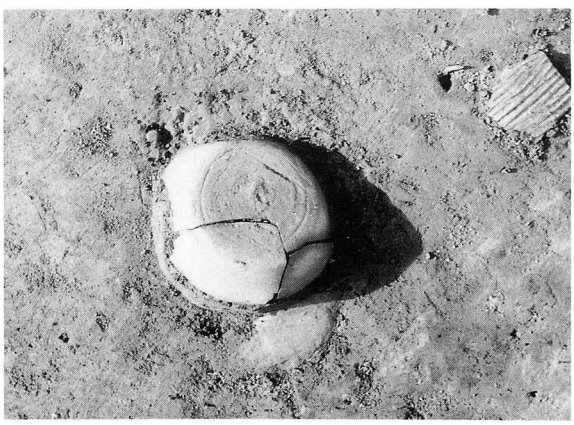

43
47
51
48
52
44
53
49
45
54
46
50
55
56
57
58
61
65
59
62
63
66
60
64
0
5
10cm

第9図　土　師　器

部分的にヨコ方向のハケ調整が用いられる。66．口径27.7cmをはかる堝。外反した口縁端部がほぼ垂直に立ちあがり、断面は三角形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部はカキメによる調整が行われる。59・60．高台を有する内面黒色の椀。59は底面に螺旋状に巡る点列がみられ、60は糸切り痕を残す。61～64．底面に糸切り痕を残す皿で内外面ともにヨコナデ調整がみられる。口径は8.3cm、8.7cm、8.7cm、10.3cmをはかる。

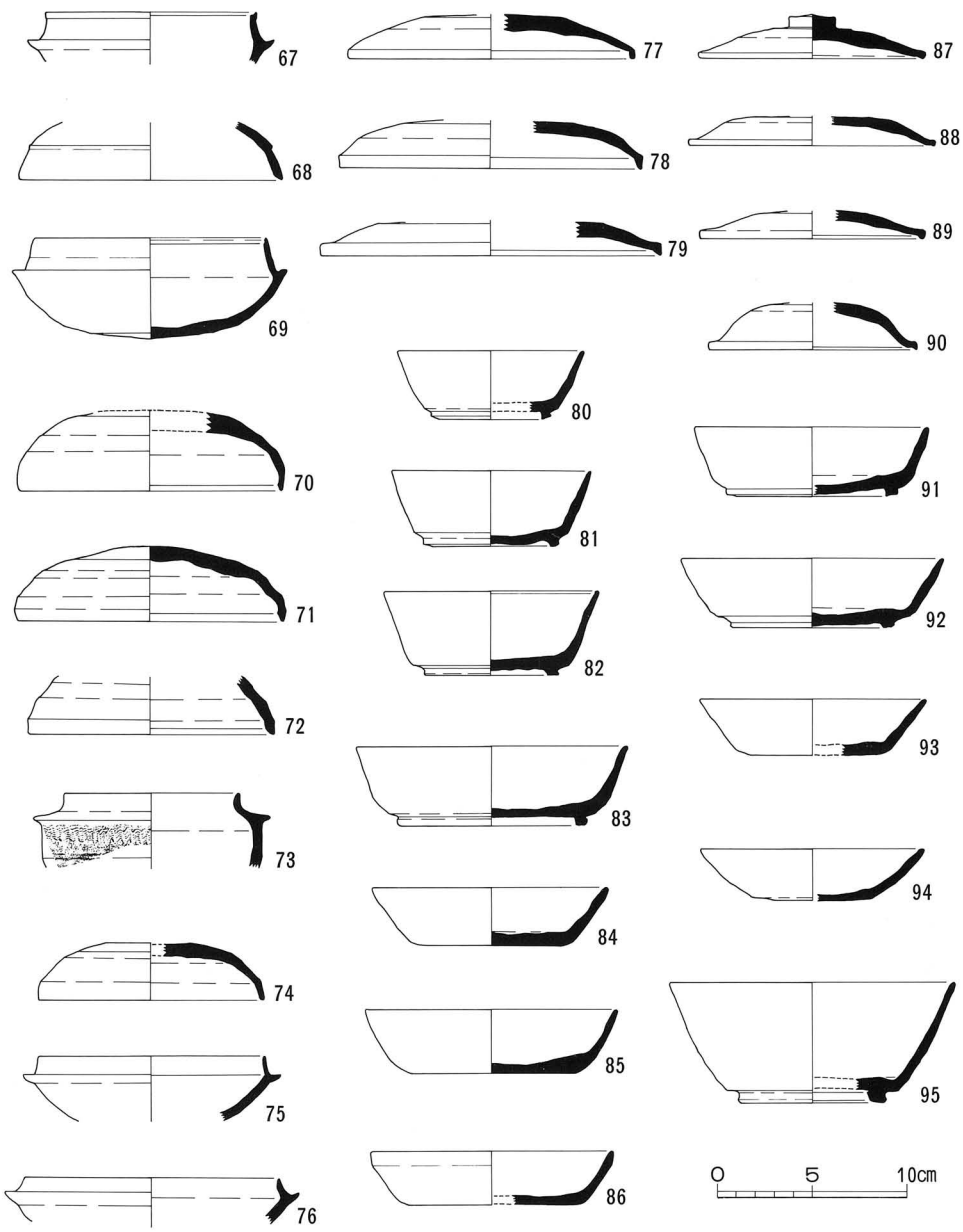
須恵器（第10図）

67．ほぼ垂直な立ちあがりをもつ坏身口縁部、端部に段をもつ。小片のため口径は推定であるが、約11cmをはかる。68．坏蓋、口径13.7cm、天井部と口縁部の境に鋭い稜をもち、端部が内傾する。69．口径12.2cm、器高5.4cm、やや内傾した立ちあがりをもち、底部にヘラ記号を有す。70～72．坏蓋、天井部から内湾ぎみの口縁部が続き、端部が内傾するもの、口径13.8cm、14cm、12.7cmをはかる。70は天井部にヘラキリ痕を残す。73．口径9.3cm、弓なりに内傾した立ちあがりを有し、体部に波状文を施す。74．口径11.8cm、扁平な天井部をもち、比較的器高が低い。天井部にヘラキリ痕を残す。75・76．口径は12cm、13.3cmをはかる。短く内傾する立ちあがりをもつ。77～79．平らな天井部をもち端部が屈曲する坏蓋である。77は口径14.7cmをはかり、天井部内面にナデ調整がみられる。78は口径15.7cmをはかる。79は口径18cmをはかる。87～89．平らな天井部をもち、端部がわずかに下方にふくらむ坏蓋である。87は口径11.8cmをはかり、扁平なつまみを有す。天井部にヘラキリ痕を残す。88は口径13cm、89は口径11.7cmをはかる。90．まるい天井部を有し、口縁部との境に平担面をつくる。天井部の調整はかなり粗雑で、



遺物出土状況

胎土も不良である。口径11cmをはかる。80～83・91・92．高台を有する坏である。口径10cm前後の小ぶりなもの（80・81）、11～12cm前後をはかるもの（82・91）、14cm前後の大きなもの（83・92）にわけられる。高台はいずれも低く、81・82・91は底面にヘラキリ痕を残すが、83・92はていねいなヘラ削が施される。84～86・93、口径12～13cm前後をはかる無




第10図　須　恵　器

高台の坏である。平担な底部をもち、底面にヘラキリ痕をとどめる。85は焼成が不良で白灰色を呈する。94．口径11.8cm、底部より大きく口縁部がひらく。95．口径15cm、器高6.4cm、底径7.6cmをはかる大きなものである。

珠洲焼

すり鉢の片口部分が１点、甕体部の小片が１点、いずれも表土中より出土している。

近世陶磁器

小片が数点、表土中より出土している。

石器

縄文土器とともに、多数の石錘・磨製石斧、その他用途不明の石器が出土した。石錘は主なものを表１および第12図にあげた。

土錘

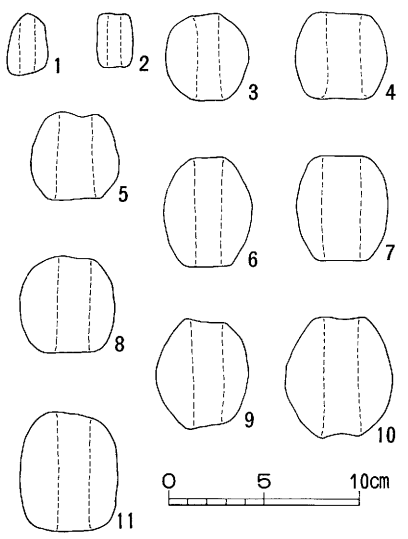
土錘は総数14点をかぞえる。表２および第11図に主なものをあげた。小品の１・２以外は、ずんぐりとした楕円形を呈す。

| 番号 | 出土地点 | 長さ(cm) | 幅 (cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E5S9V | 3.6 | 3.0 | 1.8 | 28 |
| 2 | E5S9V | 4.0 | 2.2 | 1.4 | 30 |
| 3 | E4S9V | 4.1 | 2.8 | 1.3 | 26 |
| 4 | E5S10V | 4.5 | 3.6 | 1.0 | 24 |
| 5 | E5S9V | 3.5 | 4.4 | 2.1 | 38 |
| 6 | E5S9V | 4.5 | 3.7 | 1.4 | 39 |
| 7 | E5S9V | 5.4 | 4.2 | 1.1 | 29 |
| 8 | E5S10V | 6.0 | 4.8 | 1.3 | 69 |
| 9 | E2S8V | 7.0 | 6.3 | 1.5 | 92 |
| 10 | E4S7V | 7.7 | 5.6 | 1.6 | 100 |
| 11 | E5S8V | 7.7 | 5.9 | 2.0 | 115 |
| 12 | E4S2V | 8.5 | 6.6 | 2.4 | 192 |
| 13 | E5S8V | 8.3 | 5.1 | 1.5 | 100 |
| 14 | E5S2V | 7.9 | 7.3 | 1.8 | 162 |
| 15 | E5S9V | 10.5 | 8.3 | 2.6 | 220 |

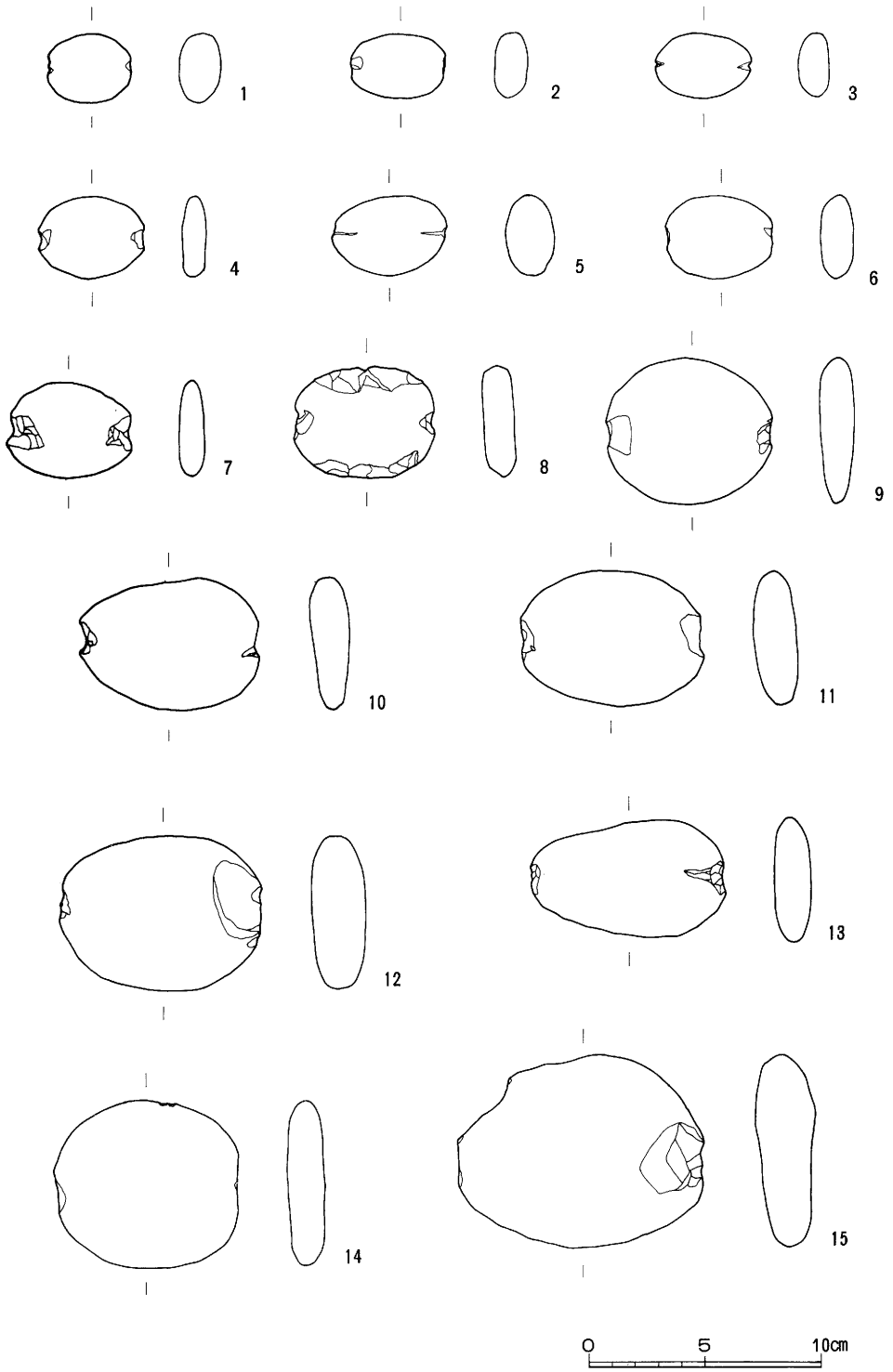
表１　石錘計測表

| 番号 | 出土地点 | 長さ(cm) | 径 (cm) | 孔径(cm) | 重さ(g) | 色　調 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E3S3I | 3.3 | 2.2 | 0.8 | 14 | 淡黄褐色 |
| 2 | 西側表採 | 2.9 | 1.9 | 0.7 | 10 | 明 褐 色 |
| 3 | E1S7 | 4.7 | 4.3 | 1.2 | 71 | 茶 褐 色 |
| 4 | E1S3I | 4.6 | 4.8 | 1.75 | 85 | 黄 褐 色 |
| 5 | E1S9 | 4.7 | 4.6 | 2.0 | 90 | 淡黄褐色 |
| 6 | E3S1I | 5.9 | 4.7 | 1.4 | 102 | 淡黄褐色 |
| 7 | E1S6I | 5.5 | 4.8 | 2.0 | 116 | 黄 褐 色 |
| 8 | E1S9 | 5.1 | 5.0 | 1.8 | 100 | 淡黄褐色 |
| 9 | E2S8 | 5.9 | 4.9 | 1.7 | 91 | 黄 褐 色 |
| 10 | E2S5 | 6.5 | 5.6 | 1.9 | 158 | 黄 褐 色 |
| 11 | E6S8 | 6.3 | 5.2 | 1.8 | 125 | 明 褐 色 |

表２　土錘計測表




第11図　土　　錘




第12図　石　　錘

# III　まとめにかえて

桜町遺跡は、かつて桜町Ａ・Ｂ遺跡の小規模な２遺跡として知られていたものが、1979年に小矢部市埋蔵文化財分布調査団の分布調査によって、縄文時代から近世に至るまでの長期にわたる複合遺跡であり、その範囲は618,000㎡にもおよぶことが確認された。翌1980年遺跡東端から実施された国道８号小矢部バイパス建設に先立って開始された発掘調査では、1981年に古苗代・鷲場地区で江戸時代中頃の木製品が多量に出土し、1982年小三味前地区で奈良時代の畦畔状遺構および掘立柱建物６棟、1983年坂東地区で奈良時代の掘建柱建物13棟、中世の建物跡２棟、中世の井戸14基、1984年産田地区で６世紀末から８世紀代の多数の遺構、遺物が確認されている。さらに、西方へ向って進められている試掘調査や今年度実施された調査においても、縄文時代から近世に至るまでの良好な遺物が出土している。

今回の調査は、遺跡内において個人の住宅が建築されることに伴って国庫補助を得て実施されたものであるが、面積が約230㎡と限られた範囲であったにもかかわらず、本遺跡が長期にわたって営まれたものであることを再確認させる多数の遺物が出土した。その多くは縄文時代中期、弥生時代後期から平安時代にかけての土器である。

縄文時代中期の土器については、現在なお整理中であり、今回の報告では対象からはずさざるをえなかった。現段階では縄文中期前葉の深鉢形土器２個体分が確認されている。弥生時代後期から古墳時代前期に含まれる土器は出土遺物中最も多くを占める。第５図、第６図、第７図16・17、第８図、第９図43・46にあげたものがこの時期に相当すると考えられる。このうち、裾部が大きくひらく器台・高坏の脚部第６図４・５、第８図23、脚部に段を有する第８図21や20の蓋形土器、22、24などは古い様相を示すもので、有段口縁に凹線文を施す第６図３、第８図26・27なども含まれる可能性がある。古墳時代後期とされるものには、第９図56・65、第10図77～85があげられ、平安時代の土器としては、第９図59～62・66、第10図87～95があげられる。

これらの土器は、さらに細分されるべきで、特に古墳時代前期としたものには、第８図25の小型器台、30の椀形の坏部をもつ高坏、41の短い脚部が裾で屈曲する高坏、第９図46の口縁部がわずかに外反する半球形の椀をそれぞれ中心とするものにさらに細分されるべきであろう。また、古墳時代後期とした土師器のほとんどは内面黒色土器であるが、第９

図55は第10図74～76にあげた須恵器との共伴がバイパス建設に伴う桜町遺跡の調査で確認されており、47～49・51～54などよりはやや後出するものと思われる。平安時代の土師器とした第９図59の底部外面にみられる螺施状点列は市内日の宮遺跡、金沢市北塚Ｂ遺跡に類例がみられ、北塚Ｂ遺跡では平安時代後期の年代観が与えられている。

なお、バイパス建設に伴う桜町遺跡産田地区の調査では、出土須恵器と掘立柱建物群の時期を三期にわけて考えられているが、今回出土の須恵器をあてはめるならば、第10図74～76はⅠ期に第17図18・19、第10図77～95はⅢ期にそれぞれ相当し、Ⅱ期とされる坏蓋内面にかえりを有するものは今回の調査ではみいだせなかった。また、67～78はⅠ期とされた６世紀末以前にさかのぼるものである。

以上、簡単に出土遺物の時期を述べたが、さらに細分されるべき土器について、また今回対象外とした縄文土器について等多くの問題点が残されており、後日に機会を改めることとしてまとめにかえたい。

**参考文献**


・小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報（1979～1983年度）』小矢部市教育委員会1980～1984

・小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市遺跡地図・台帳』小矢部市教育委員会1985

・上野章他『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会1978

・伊藤隆三『富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査概報』小矢部市教育委員会1980

・伊藤隆三他『富山県小矢部市桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』小矢部市教育委員会1982

・安念幹倫他『富山県小矢部市桜町遺跡―産田地区発掘調査概報―』小矢部市教育委員会1985

・藤田富士雄他『飯野新屋遺跡発掘調査概報』富山市教育委員会1984

・吉岡康暢「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』６　ニュー・サイエンス社1976

・吉岡康暢他『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会1983

・戸澗幹夫他『北塚遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター1985

・田嶋明人他『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター1986

図版1

遺 構 全 景

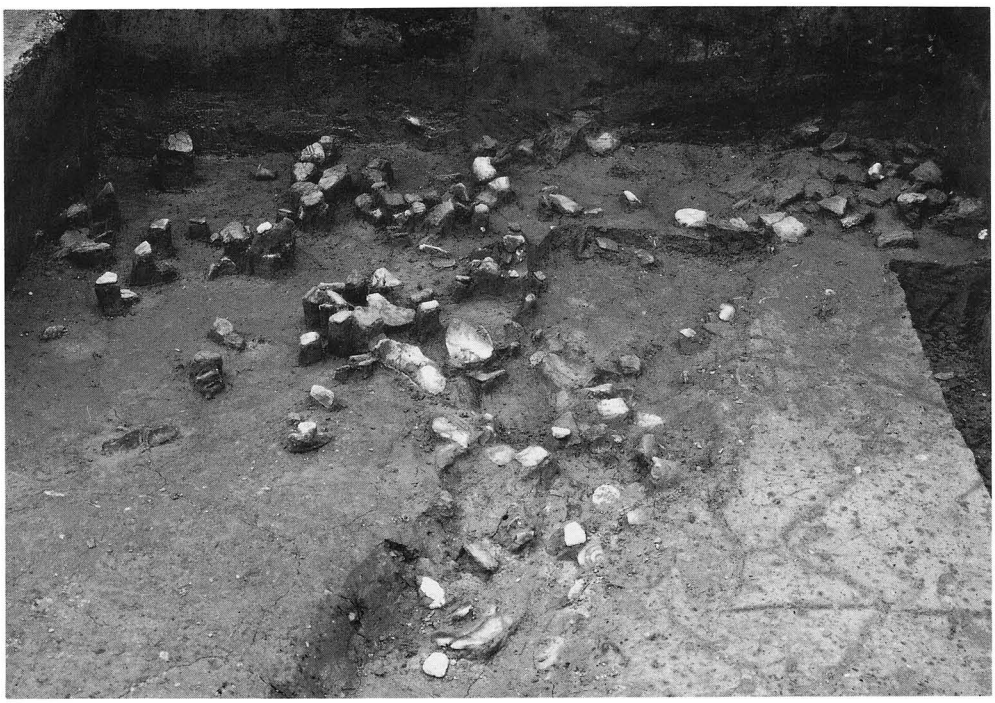
S D － 1

SD－2・3

SD－3

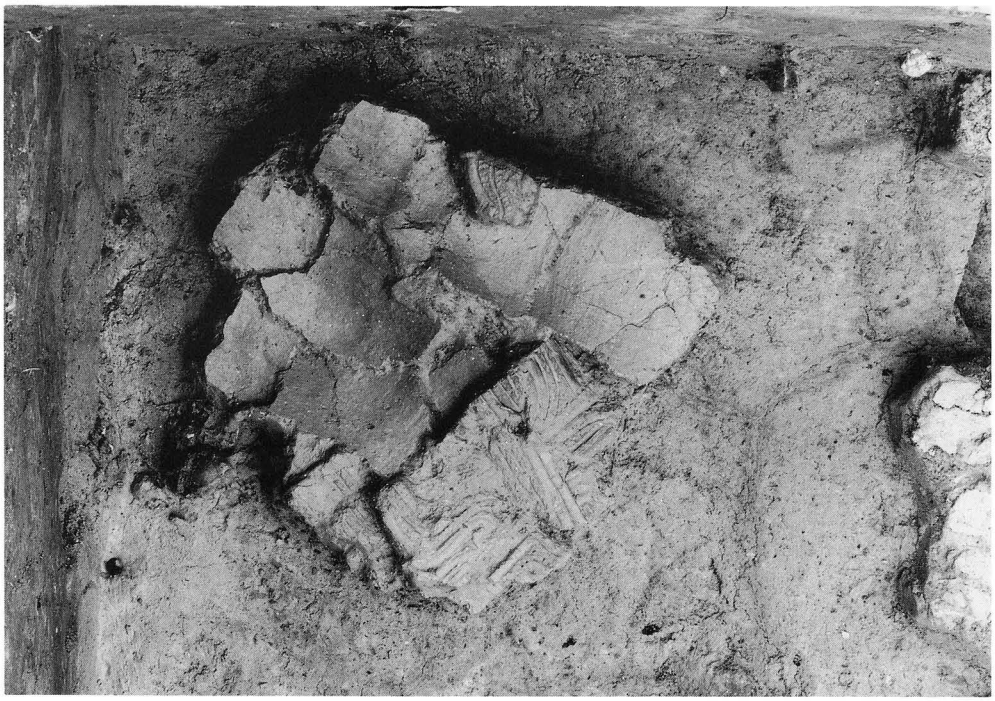
図版3

調査終了後



縄文土器出土状況

縄文土器出土状況



縄文土器出土状況

図版5

縄文土器出土状況

縄文土器出土状況

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第20冊

富山県小矢部市　桜　町　遺　跡
—個人住宅建築に伴う中出地区の調査—

発　行　日　　1987 年 3 月 31 日
編集・発行　　小矢部市教育委員会
　　富山県小矢部市本町 1 番 1 号
印　　刷　　アヤト印刷株式会社